

『熱物性』原稿執筆要綱

1. はじめに

本要綱では、原稿執筆要領のみを記述する。論文投稿の資格、会誌「熱物性」が扱う熱物性の範囲、原稿の種類、投稿論文の取扱いなどについては、別掲の「熱物性」投稿規定を参照されたい。

なお、原稿の作成に際しては、本執筆要綱を十分に参照の上、MS-Word用テンプレート(JSTP Template.dot、熱物性学会ホームページよりダウンロード可能)を利用することを推奨する。

2. 原稿形式

原稿は、ワープロソフトもしくはDTPソフトで作成し、PDFファイルに変換して提出する。

2.1 原稿ファイル書式用紙と印刷方法

題名、著者名、所属、所在地、要旨、本文および文献などの記載法は以下の通りとする。指定以外のフォントを利用した場合、提出されたPDFファイルが正しく表示・印刷出来ない場合があるので、使用フォントには(図注のコメントなども含め)十分に注意する。

最終頁の余白は極力少なくすると共に全体のレイアウトなどを工夫し、残った余白は左右の段が均等になるように配置する。図・表を貼り込む際には、印刷サイズが原稿の82%に縮小されることを考慮し、解像度やファイルサイズに配慮して電子ファイル内に直接貼り付ける(その際、不必要に高解像度のファイルを貼り付けファイルサイズを大きくしないように配慮する)。

原稿用紙、余白、文字サイズなどを以下に示す。

原稿ファイル書式

用紙サイズ: A4

余白: 上下余白20mm、左右余白15mm

書式: 2段組、段間隔余白8mm、両端揃え

(和文) 一行文字数 24 ± 2 文字、頁行数 42 ± 2 行 (英文) 頁行数 52 ± 2 行

基本フォント:

(和文) 明朝体(MS明朝推奨)、10pt、漢字および仮名は全角、英数字、括弧、記号、単位は原則として半角とする。

(英文) Times New Roman、11pt、proportional

題目等のフォント

題名; 和文20pt、英文16pt、中央揃え

著者名; 和文14pt、英文13pt、中央揃え

要旨; 1段組、左右余白25mm、両端揃え、和文10pt、行間 52 ± 2 行/頁、

英文11pt、行間 60 ± 2 行/頁 (要旨の有無、字・語数などは投稿規定を参照)

所属など; 和文、英文とも9pt、先頭頁の左欄下に左揃えで記載。本文と横線で区切る。

記号; 英語、11pt、左揃え、行間 52 ± 2 行/頁

参考文献; 10pt、左揃え、行間 52 ± 2 行/頁

図・表説明; 原稿の和英にかかわらず英文で記載する。Times New Roman、11pt、行間50行/頁

2.2 題名、著者名、所属、所在地など

本文は2段組とするが、1頁目の1行目の左上に論文、速報、総合論文、総説、解説、展望、ノート、講座などの区分を【 】を付けて和文(10pt)で記入する。

本文が和文、英文いずれの場合でも、題名、著者名、要旨、所属、所在地を和文・英文で併記する。ただし本文が英文であり、著者全員が外国人の場合は和文を省略することができる。

題名は2行目から和文(20pt)および英文(16pt、主な単語の初めの文字を大文字)で、著者名はさらに1行あけて和文(14pt)、英文(13pt)で書く。連名の場合は名前の間をカンマで区切る。著者により所属が異なる場合は名前の後に*印を付けて区別する。

要旨(左右の余白 25mm)は1段組とし、著者名から1行あけて和文(10pt、両端揃え、行間 52±2 行/頁)で、さらに1行あけて英文(11pt、両端揃え、行間 60±2 行/頁)で書く。英文要旨の下に4～6語のKeywords(英語、"Keywords"は強調、左揃え)を[]で囲って付ける。

所属および所在地は、原稿先頭ページの2段組左最下欄に横線を入れ、和文および英文(9pt、左揃え、行間 60±2 行/頁)で書く。できればFAX番号、E-mailアドレスも記入する。

2.3 見出しなど

この手引きのように、大見出しは通し番号を付けて中央に強調文字で書き、前後に1行あける。中見出しは2.1や3.3のように番号を付け、番号の次を1字あける。それに続く文章は改行する。中見出しの前1行をあける。小見出しは2.1.1や3.3.1のように番号をつけ、番号の次を1字あける。それに続く文章は改行する。

見出しの数字は全角、点は半角が望ましい。行の初めに、括弧、ハイフンなどが来ないように工夫する。

2.4 謝辞

謝辞は必要に応じて本文の直後に下記のように記載する。

[謝辞] 鍵括弧、強調文字で見出しを書き、改行して文章を続ける。前1行あける。

2.5 量記号、単位

量記号と単位にはそれぞれイタリック(斜体)とローマン(立体)を用いる。数式の多い文章などには必要に応じて記号欄(英語のみ)を本文または謝辞の後に設ける。見出しは前1行あけ、強調、中央揃え。記号、説明、単位は左揃えとする。11pt、行間 52±2 行/頁 とする。

2.6 参考文献

2.6.1 番号の付け方

参考文献は本文中の該当するところに、[1]、[2,5]、[4-7]のように通し番号を入れる。本文、謝辞または量記号の後に前1行あけて参考文献(10pt、強調、中央揃え)と書き、次の行から左揃えで、通し番号順に並べる。行間 52±2 行/頁 とする。

2.6.2 参考文献の書き方

複数の著者がある場合は、省略せず著者全員を記入する。雑誌名の省略法は Chemical Abstracts 誌による(または ISO 833 に準拠する)。その他は以下の例を参照のこと。

参考文献記載例；

参考文献

- [1] 日本太郎，東京次郎，筑波三郎；「論文の表題」，熱物性，12 (1998) 123-127.
国内雑誌和文論文の場合、著者名は姓名を書く。著者名の後にセミコロン；を入れ、雑誌名、巻数[号数](発行年)、初めと終わりのページを記す。巻数[号数]は強調文字とする。号数は号毎にページを付けている場合のみ、12-3のように記入し、巻でページを採用している場合は記入しない。
- [2] A.B.Smith, C.D.Johns; "Thermophysical Properties of Solid", Int.J.Thermophys., 19 (1998) 234-238.
複数の著者の場合、名前の間はカンマ(後ろ半角あける)で区切り and を入れない。著者名は姓以外はイニシャルだけとする。著者名の後は[1]と同じ。
- [3] 日本太郎；「熱物性測定法」，東京次郎編 3巻(1998) 789，熱物性出版社。
単行本の場合、著者名、「書名」編者名(発行年)記載ページ数、発行所、出版地とする。
- [10] A.B.Smith; "Thermophysical Properties", ed. C.D.Jones Vol.3 (1998) 345, JSTP Press, New York.

2.7 受付・受理年月日

原稿の受付・受理年月日は、掲載が決定した後、編集委員会からの指示に従って、最終原稿に下記のように、参考文献の後に1行あけ、Times系のフォントを用いて右寄せで記入する。投稿時は、行のみを確保し、日付は空欄とする。

[Received Dec.1, 2007, Accepted Jan.1, 2008]

3. 用語，単位，数式，図表

3.1 用語

和文は当用漢字とひらがなを用い、新かなづかい、平易な口語、である調で書く。文部省編の学術用語集の用語を用いる。英文は、英式か米式のいずれかの綴りを用い、混用は避ける。

3.2 単位

単位はSI単位を用い、やむをえず非SI単位を用いる場合はSI単位との換算を記載する。

3.3 数式

数式は、MathTypeなどの数式エディタを使用して作成するのが望ましい。

本文中に数式を書くときは $(a/b) \log(cd/e)$ 、 f/g のように書き、出来るだけ行間を保つようにする。数式中の上付き・下付き添え字のために行間が変わるのは可とする。

数式のみを一行に書く時のみ

$$\frac{a}{b} \log \frac{cd}{e}, \frac{f}{g} \quad (1)$$

のように書き、その行の後に数式の通し番号を () に入れる。式の前後1行あける。

3.4 図表と写真

Fig. 1 , Table 1 のように通し番号を付け、説明文などは英文とする(11pt、行間 52 ± 4 行/頁)。

図表と写真の上下は1行スペース行を入れる。

4. 英文での執筆における注意事項

本文を英文で執筆する場合においても、和文原稿と同様に、題名、著者名、所属、所在地、要旨は和・英文を併記する。本文は 11pt、2 段組、両端揃え、頁行数 52±2 行とする。大見出しは大文字(強調、中央揃え、前後 1 行あける)、中見出しは主な単語の初めの文字を大文字、小見出しは最初の単語の先頭文字のみ大文字とする。記号、謝辞、参考文献などは和文の書式に準ずる。

5. ファイル原稿のPDF変換・提出に関する注意

MS-Word などのワープロソフトで作成した原稿は、PDF に変換して提出する。その際、下記の点に注意する。

指定以外のフォントを使用しない(指定以外の特殊なフォントを使用すると、表示・印刷に支障を来す場合があります)。

フォントはすべて埋め込みで、PDF 設定は『標準』もしくは『高品質印刷』とするが、その際、完成後のファイルサイズを考慮する。

PDF 変換の際に、文字化けやレイアウトの変化が発生する場合もあるので、PDF 化した原稿は、提出前に必ず確認する。

完成した原稿のPDFファイルは、熱物性学会編集委員会委員長宛電子メールに添付して送付する。その際、添付ファイルのサイズによっては、電子メールが配信されない場合もあり得るので、原稿を添付しないメールも確認のために併せて送信するのが望ましい。